



社会福祉法人
同胞援護婦人連盟

こどものうち八栄寮
10 歳女兒 作

「就任にあたり」

理事長 小島 敏行

本年 3 月 29 日付けで前任の村松満理事長の後を継ぎ、理事長に就任いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。就任して最初に始めたのは、法人の展開する「こどものうち八栄寮」「リフレここのえ」「オリーブみらい」の各施設を見学することでした。施設長に施設で生活する子どもたちの様子を伺いながら、偶然、居合わせた子どもたちの明るい笑顔とそこで従事する職員の皆さんの子どもたちに向ける優しいまなざしがとても印象に残りました。そして、応接室で目にした「私たちはあらゆる人や物を慈しみ、おおらかに包み込む心と態度で人との絆をはぐくみ、あたたかく明るく輝きに満ちた世界を創り出すための核になりたいと願っています」との法人の理念が自然と心に浮かびました。

本法人は本年 80 周年を迎えます。同胞援護婦人連盟 50 年記念誌には戦後まもなく、満州からの引き揚げ者や孤児のために法人を立ち上げ、上野駅にこどものうち上野寮、引揚者ホームを設立、その後、千葉県富里村七栄に児童養護施設を開設し、福祉事業に取り組んできたことが記述されています。戦後、国家が混乱している時代に法人主導で祖国に戻る人々に手を差し伸べる事業を展開されてきたことは筆舌に尽くし難いご苦労もあったかと拝察いたします。それを可能にしたのは、開設者である伊藤房緒先生の強い信念と、その思いを共有しそれを支えた人たちの智慧と強い結束があったからにほかなりません。

そして、1965 年成田空港の開港に伴い、施設が八王子に移転してきたことを知りました。私の母も満州からの引き揚げ者で戦後の混乱の中、福岡から故郷に戻っていますがこうした史実に触れることで当時の母の生活が重なり、どこか不思議な縁を感じています。

50 周年記念誌の後書きには「うちとは構造物ではない。人々の営みであり、成長の証を刻むところ」と記されています。建築物や建造物を差す単なる「施設」ではなく、皆が生活し、育ち合うひとつの大きな家族の土台であるということ。それが「こどものうち」という名称に込められていることに法人運営の柱としての崇高な理念を強く感じます。

子どもたちを取り巻く環境は、終戦時とは比較にならないほど豊かになりました。しかし、一人ひとりの子どもたちに目を向けると、残念ながら今の社会においても形を変えた厳しさが存在しています。こうした状況にしっかりと向き合い、子どもたち一人ひとりが自分の未来を描けるよう、法人の理念を大切にしながら、職員の皆様とともに先人たちが刻んできた「慈愛と包容そしてつながり」を胸に法人運営に取り組んでいく決意です。

過去から現在



こどものうち八栄寮 施設長 大村 正樹

当法人の創設者伊藤フサヲ（以下「フサヲ」という）は印象深い言葉を残している。

「馬を連れて上京せよ」

終戦直後、当法人は岩崎財閥から千葉県富里村の土地 24,000 坪の払い下げを受け、昭和 27 年に「こどものうち七栄寮」（以下「七栄寮」という）を開設した。この土地は杉・松・檜が植えてある山林だった。フサヲはここを開墾し、畑を作り、食料になるものを作ろうと考えた。そこで北海道の実家にいた弟・伊藤益之（以下「益之」という）に電報を送った。

益之は飼っていた馬「たちばな号」を連れて、貨車で上京した。千葉県成田駅からは馬を連れて「七栄寮」まで歩いて行った。「たちばな号」は大きな木の根を掘り出し、開墾し、畑を作った。畑には西瓜、落花生、ジャガイモ等毎日の食用とする野菜などを作った。子ども達はその馬を「たち」と呼んでいた。

畑の野菜作りから養鶏、養豚、酪農と進み、子ども達には当時ではなかなか口にすることができなかった牛乳を飲ませることができた。また、牛の世話・乳しぼりは大きい子ども、鶏・豚の世話は小学生の仕事だった。このように子どもも大人もみんなで共に生きてきた、と当時を知る関係者から私は聞いた。

「勉強したい子には誰でも教育を受けさせたい」

上野駅前に開設した引揚げホームには、引揚げ事業が終了したのちも子ども達が残ри、「七栄寮」よりも一足早く「こどものうち上野寮」（以下「上野寮」という）を開設していた。

「上野寮」には中学生、「七栄寮」には幼児、小学生、女子児童達が入所していた。「七栄寮」の子ども達でも勉強して高校に行きたい子どもは、途中で「上野寮」に移っていた。

当時中卒が当たり前の時代の中、高校に入学させ、さらに大学にまで行かせた。中には大学の先生になった方もいる。

「共に生きる」

上野駅前にあった「上野寮」は借地だった。土地を返還することになり、昭和 39 年に八王子に転居することになった。当初、寺田地区に仮住まいをし、現在地に建物（大舎制の建物）の建設が始まった。しかし、山一つ分の土地しか購入できなかった。

その頃、富里では飛行場建設（後の成田空港）の話が持ち上がっていた。広大な「七栄寮」の土地は県道に面しており、日に日に地価が上昇した。その土地を売却し、八王子の土地購入に充てることになった。「七栄寮」の土地は手放したくなかったが、新しい施設の建設のためにはそうするしかなかったそうだ。

建物はできたが、それ以外のグラウンドなどは作ることができなかった。そのため、職員と子ども達がシャベルやクワで土を掘り返し、モッコを担ぎ、一輪車を押し、グラウンドを整備した。先日、70 代と思われる退所者の方がお見えになり、施設内を案内した時、ご自分もグラウンド整備を職員と一緒にやったと懐かしそうに話していた。このように職員と子ども達が力を合わせて生活を守り、発展させる取り組みの経験から、フサヲはこの言葉をよく言っていたそうだ。

「面白い人生だった」

フサヲは子ども達の幸せを願い、何としても子ども達の命を守りたい、そして教育を受けさせたい、自立できるように育てたい、と子どもと共に生き、共に歩んできた。お金がないから出来ない、場所がないから出来ない、人がいないから出来ないと言っ

てあきらめることはしなかった。このように沢山の苦勞を子どもと一緒に背負いながら、生き抜いたフサヲは、「いろいろな人とぶつかり、喧嘩もしたけど、自分の思ったことをやり抜くことができ、面白い人生だったよ、楽しかったよ」と述べ、波乱万丈の人生を終えたという。

これが伊藤フサヲの言葉を通してみた法人の歴史である。



創立 80 周年のお祝い膳



きゅうりを漬けた、ぬか床は
厨房職員が 60 年以上代々
引き継いできたものです。

バター醤油ご飯



こどものうち八栄寮 児童指導員 岩渕 佳子

平成3年11月、旧館（男子棟）担当で此処八栄寮が私の住まい兼職場となった。未だ昭和感たっぷりで、設備や衣服も修繕し大切に使っていた。当時の風景を少し。お勝手の先生が大きな鐘を響かせて食事を知らせる朝から一日が始まる。眠そうな顔で食堂に集まってくる子どもたち、食事席に着くと「～身魂に感謝して頂きます」。箸を取ると、中には苦手なモノを誰かの皿に移す子、床にこぼす子、居眠りしちゃう幼児さん等々。いい加減な記憶で言うと食事とおやつはお勝手の全権。登校班は下駄箱先の玄関に整列。寝ぐせに欠伸（笑）。中学生の宿題消化は夜に食堂で？百人一首がみんな妙に上手い。風呂は二日に一度？タイル張りの広い浴室で脱衣室は木製の仕切り棚、ちょっとした銭湯感有り。「あ、しまった、パンツ忘れた！」なんて事も。建物は横1文字で男女は中央の食堂、ホールを堺に東西に配置。TVはホールに1台。イケてるアーティスト推しとか、面白い女子中高生の会話があって何か癒されたなあ。平成4年6月小舎完成で本園3棟、分園2家に分散移住。男女幼少中高混合の12名、担当職員3名でスタート。ごはんのみそ汁が各棟調理となり、バター醤油ご飯をキラキラの目でおかわりしてた子、玄関先でべそをかいていたおチビちゃん、退寮後消息が分からない子。みんな元気かい？誰もが元気で自分の人生を生きていて欲しい。



大舎制の時代と現在の小舎制の日課と行事



こどものうち八栄寮 用務員 早川 憲治

私が「こどものうち」で働き始めたのが1987年。東京都の行政も児童養護施設も「大舎制」から「小舎制」そして「グループホーム」への制度移行の時代でした。「大舎制」と言われても「それ何？」と多くの人々は思うかも知れませんが、応接室の大きな写真を見て下さい。そこには西側の男子棟、東側の女子棟、その2つを繋ぐ食堂とホールの勇姿が写っています。食事は食堂で全員一緒に頂きました。朝食時は祈りの言葉「神様、私たちの身魂の養いとして今ここに賜りました御恵みを感謝奉ります」を合掌唱和して食べ始めます。朝食が終ると男子指導員が新聞記事を児童に読み聞かせ、政治、経済、事件やニュースをテレビとは別の視点で伝えていました。この施設は「感謝」と「ニュース」を大切にしていると印象強く心に刻みました。夕食前の食堂は小学生の学習室に、夕食後は中高生の学習室に。終わると順次入浴となり、ホールでは、1台のテレビを皆で見る為にチャンネル争いもしばしば起こりました。行事も今より活発で自由な時間が少なく、集団生活なので我慢することも多く、「自由がない、面倒臭い、うるさい・・・」と不満を口にする児童も居ました。今、こどものうちの小舎で生活している皆さん、このことは忘れないで欲しい。ここにきた背景はそれぞれ異なりますが、いのち、人生、生活が守られ（権利擁護）、一人の人間として、成長して社会に参加して行く（自立支援）を日課やグループワークを通して学んでいることを。そして児童も職員も「明るく温かく輝きに満ちた」「全ての人々が幸せとなる」社会作りの「チームこどものうち八栄寮」の大切なメンバーの一員であることを。これは80年前の法人の時も、2026年の今現在も変わることのない最も大切なことなのです。今も未来もずっと応援しています。Good luck!!



ご挨拶



リフレここのえ 施設長 渋谷 行成

本年 4 月 1 日より、リフレここのえの施設長になりました。どうぞよろしくお願いいたします。40 年以上前ですが、学生の時、こどものうち八栄寮で働くことを希望していましたが、大学教員の推薦があった他の学生がこどものうち八栄寮に就職し、その時は、残念なことにご縁がありませんでした。今回、45 年ぶりにご縁があつて、法人のお仲間になったこと非常に嬉しく感じております。

「多くの人がレッテルを貼っているとき、果たしてそうかと思うこと、多くの人が見て見ぬふりをしているとき、その子どもに寄り添い続けること」

前職（大学教員）で、教育や保育を学ぶ学生に、教育者、保育士、社会福祉士、ソーシャルワーカーとして、私が現場で直接かかわった体験から、大切にしてほしいことを、繰り返しくりかえし伝えてきた言葉（想い）です。私自身もその言葉（想い）を大切にし、利用者の方々や子どもたちに「出会えて良かった」と思っていただけの場所（母子生活支援施設）を、明るく真摯な職員と共に、皆様のご指導とご協力をいただきながら、引き続きつくっていきたいと考えています。

至らないところも多くあると思いますが、また、10 年ぶりの母子生活支援施設での現場復帰で不安もありますが、今回のご縁を大切にしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。



これまでのリフレここのえの様子
(2008 年頃～2014 年頃)



【各施設 在籍者数】（令和 8 年 5 月末現在）

こどものうち八栄寮		リフレここのえ		八王子市子ども家庭サービス事業利用者数	
幼児	9 名	乳幼児	17 名	令和 7 年 12 月～令和 8 年 5 月末	
小学生	16 名	小学生	12 名	ショートステイ	474 名
中学生	5 名	中高生	2 名	トワイライトステイ	246 名
高校生他	16 名				【計 720 名】
【計 46 名】		【計 18 世帯】			

ありがとう



リフレここのえ 母子支援員 田中 十代子

私がリフレここのえに入職して17年が過ぎました（リフレここのえは設立21年目を迎えています）。この間、たくさんの方々との出会いがありました。その中に、いつも私の事を心配して気にかけてくれるお母さん方がいました。私が宿直をしていると「もう年なんだから塩分控えてよ。これでも食べて」とチャーハンを持ってきてくれます。また、別のお母さんはぶっきらぼうに「早く帰って寝な」「まだ仕事終わらないのか」と声をかけてくれます。日中に話が出来ないからと夜中に泣き笑いのお茶会をしたお母さんもいます。大変なご苦労がありながら懸命に生きてこられた方々です。不器用ながら自分の事より他の人を気遣う心からの優しさと元気をもらってきました。

たくさんの方々との出会いはたくさん笑顔との出会いでもあり、今の私の宝物で支援の土台の一部になっています。出会えたご縁に感謝です。「ありがとう」。

出逢い



リフレここのえ 自立支援担当職員 内藤 珠美

実習生として八栄寮にお世話になったのが私と法人との出逢いです。子ども達と過ごす毎日はとても楽しく、八栄寮で働きたいと思い学生時代のボランティアを経て就職することができました。夜になっても帰ってこない子どもを探しまわったこと、思い通りにならずにイライラした子どもから物を投げつけられたこと、何度も何度も子どもと向き合い、何回も何回も涙を流しましたが、思い出すのは子ども達と生活を共にした充実した日々です。沢山かかわった子どもが退寮時の門出祝いで「出逢えてよかった。」と言ってくれた時には、辛かったことを忘れてしまいます。その繰り返しで何年も八栄で働くことができました。

現在は同じ法人のリフレここのえで母子の支援をしています。形態は違いますが、子どもの成長と、家族の幸せを願う仲間と共に今も変わらず充実した日々を過ごしています。80周年おめでとうございます。



同胞援護婦人連盟 創立 80 周年

終戦翌年の昭和 21(1946)年 6 月、伊藤房緒によって同胞援護婦人連盟は結成されました。団体名には、引揚者や海外に残留している「同胞」を「援護」するために集まった、20 もの「婦人」活動団体の「連盟」という意味が込められています。

連盟は、上野駅前の「引揚者ホーム」をはじめ、戦災孤児や引揚孤児と呼ばれた身寄りのない子どもたちの住まいである「上野寮」、千葉県の大田区で自給自足の生活を営んだ「七栄寮」を開設しました。モノもお金もない混乱した情勢の中で、活動資金や支援物資、建物を確保するために発揮されたアイディアと行動力は、連盟の「あたゝかく、明るく、かどやきにみちた世界をつくる」という設立の趣旨を体現するものでした。

その後、時代変化とともに、活動の拠点は八王子市へと移りました。現在では、児童養護施設「こどものうち八栄寮」、母子生活支援施設「リフレここのえ」、学習塾「オリーブみらい」、子育て応援ひろば「てんとうむし」を拠点に、児童福祉に関わる複数の事業を展開しています。これらの施設や事業にも、伊藤房緒が掲げた「共に生きる」という理念が脈々と受け継がれています。

<伊藤房緒ってどんな人？>

伊藤房緒は、明治 33 (1900) 年、北海道湧別町に生まれました。上京後、日本女子商業学校を経て日本女子大学英文科を卒業し、英語教師の職に就いた。その後、東亜育英会で満洲国からの留学生育成に携わり、国本高等学校の創設にも協力した。敗戦後の昭和 21 (1946) 年、同胞援護婦人連盟を設立し、引揚者や戦災孤児、引揚孤児の支援活動を開始。「引揚者ホーム」や「上野寮」「七栄寮」を開設し、子どもたちの保護と自立支援に尽力した。また、婦連製パン株式会社を設立して事業運営を支え、後に八王子市へ活動拠点を移し「八栄寮」を開設した。長年にわたる児童福祉への功績により東京都から表彰を受け、昭和 45 (1970) 年には勲六等宝冠章を受章した。昭和 58 (1983) 年、83 歳で死去。



こどものうち上野寮にて
(北海道新聞社／1955 年頃)



こどものうち上野寮
伊藤房緒と子どもたち (1963～65 年頃)

<沿革>



上野寮の引っ越し



七栄寮外観



七栄寮防火用水プール

- 昭和 20 年 終戦
 昭和 21 年 6 月 同胞援護婦人連盟設立 9 月 上野駅前に引揚者ホーム開設
 後に、こどものうち上野寮となる 12 月 財団法人に組織変更
 昭和 23 年 こどものうち七栄寮開設
 昭和 24 年 婦連製パン株式会社（通称：フレンパン）設立
 昭和 27 年 社会福祉法人に組織変更
 昭和 45 年 八王子市へ移転 こどものうち八栄寮開設
 昭和 63 年 グループホーム上野町寮開設
 平成 2 年 グループホーム虹の家開設
 平成 3 年 八栄寮を全面改築し、大舎制から小舎制へ
 平成 13 年 八王子市子ども家庭サービス事業
 （ショートステイ・トワイライトステイ事業）受託
 平成 17 年 母子生活支援施設リフレここのえ開設
 平成 20 年 2 つの GH に代わり地域小規模児童養護施設「虹の家」「宇宙の家」開設
 平成 29 年 学習塾オリーブみらい開設
 平成 30 年 子育て応援ひろばてんとうむし開設
 令和 3 年 八王子市支援対象児童等見守り事業受託
 令和 6 年 東京都妊産婦等生活援助事業受託「にんしんサポート Frill」



七栄寮（馬小屋と落花生）



七栄寮（バス停前にて）



上野寮の学習室（1963 年）

<設立当初に行われた資金繰り活動>

昭和 21 年～24 年にかけて実際に行われていた資金繰り活動の実績です。伊藤房緒が目的のためにあらゆる手をつくす、アイディアンであったことがうかがえます。

- ・街頭募金
- ・「音楽と映画の会」や「クリスマス会」等（引揚者ホームの建設資金）
- ・引揚者のための新生活マーケット（バザー）
- ・夜間学校の給食提供
- ・百万人の合力運動（七栄寮の建設資金）
- ・七栄寮の収穫物を販売
- ・厚生省内の売店運営
- ・婦連製パン株式会社設立（世界で初めてサンドイッチを三角に）



これまでの 80 年を支えてくださった皆様に深く感謝申し上げるとともに、これからも子どもたちと家族の未来が「輝きに満ちた世界」となるよう、職員一同歩み続けてまいります。

※写真は AI にてカラー化処理をしています。

資金収支決算書 令和7年度

社会福祉法人 同胞援護婦人連盟

単位:千円

勘定科目			本部	こどものうち 八栄寮	リフレ ここのえ	子ども家庭 サービス	子育て 応援	内部 取引	合計
事業活動による収支	収入	児童福祉事業収入	0	536,587	159,673	19,570	7,515		723,345
		経常経費寄附金収入	1,476	1,341	21	0	10		2,848
		受取利息配当金収入	384	642	329	11	2		1,368
		その他の収入	2,024	18,372	67	3	0		20,467
	支出	人件費支出	3,437	352,667	91,175	17,365	11,450		476,095
		事業費支出	0	75,093	10,565	1,309	1,475		88,443
		事務費支出	3,919	43,625	18,284	1,091	3,831		70,750
		その他の支出	0	3,227	57	35	35		3,354
		流動資産評価損等による資産減少額	0	0	0	6	0		
施設整備等による収支	収入	施設整備等補助金収入	0	3,021	0	0	0		3,021
		固定資産売却収入	0	14	0	0	0		
		その他の施設整備等による収入	0	33	0	0	0		33
	支出	固定資産取得支出	0	16,978	3,012	0	0		19,990
		ファイナンス・リース債務の 返済支出	0	920	0	0	0		920
		その他の施設整備等による支出	0	143	0	0	0		143
その他の活動による収支	収入	積立資産取崩収入	117,027	66,036	3,345	0	0		186,408
		事業区分間繰入金収入	0	0	0	0	9,595	- 9,595	0
		拠点区分間繰入金収入	7,032	0	0	0	0	- 7,032	0
	支出	積立資産支出	117,027	122,933	36,313	0	0		276,274
		事業区分間繰入金支出	0	4,797	4,797	0	0	- 9,595	0
		拠点区分間繰入金支出	0	3,516	3,516	0	0	- 7,032	0
当期資金収支差額合計			3,561	2,146	- 4,284	- 224	330		1,529
前期末支払資金残高			198,882	140,502	43,181	2,408	873		385,846
当期末支払資金残高			202,443	142,648	38,897	2,184	1,203		387,375

※千円未満を四捨五入しているため合計数が合わない場合があります

～ご寄付のお願い～

- 郵便振替 : 社会福祉法人同胞援護婦人連盟 00110-1-499359
- ゆうちょ銀行 : 社会福祉法人同胞援護婦人連盟 019店 当座 0499359
 - ・折り返し当法人からの領収書をお送りします。
 - ・社会福祉法人に対するご寄附は確定申告で所得控除の対象になります。
 - ・住民税控除についてはお住まいの区市町村へお問い合わせください。

 社会福祉法人 同胞援護婦人連盟 児童養護施設 こどものうち八栄寮 母子生活支援施設 リフレここのえ 八王子市 子ども家庭サービス事業 〒193-0944 東京都八王子市館町 2232-1 Tel:042-661-5891 Fax:042-667-0006 http://www.doenfujin.jp	編集後記 今回のテーマは「80周年を迎えてーpastー」です。当法人は今年6月10日に創立80周年を迎えました。これまで当法人をご支援頂いた皆様に心より感謝申し上げます。今号では当法人が歩んできた軌跡、past(過去)にフォーカスしました。創設当時の思いや願いを改めて受け取り、未来にバトンをつなげていきたいと思います。次号はfuture(未来)をテーマにお伝えいたします。 【広報誌担当 林つく詩 鈴木奈津実】
---	---

ご意見・ご感想・ご質問を法人宛のお手紙または FAX でぜひお寄せ下さい。お待ちしております。